

ラオスのこども通信

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- おはなし・絵本づくり、大盛況 ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2011.7-11]
ラオス発 ▶ p.2 日本発 ▶ p.3
- みんなでボランティア ▶ p.4
- 「勉強会」報告 ▶ p.4
- メコンのほとり「詩」 ▶ p.4



おはなし・絵本づくり、 大盛況

2011年11月26、27日、当会はおはなしづくり教室をヴィエンチャンで行い、子どもたち220人、青年30人が参加する大盛況となりました。タイの絵本作家ブリーダー・パンヤージャーンさんとム・スッパタイさんを講師に迎え、手品師のように次から次へとおはなしや遊びが出てくるレッスンに、ちびっこも若者たちも自由に空想を膨らませて絵を描き、おはなしを作りました。



思い思いに描き、おはなしが広がります

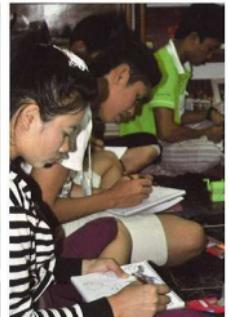
「正解も不正解もないんだよ」

子ども向けには共催のヴィエンチャン都子ども教育開発センター(CEC)を会場に、5つのキーワード「羽の生えたゾウ」「お腹を空かせたウサギ」「子ども」「分ける」「お菓子の山」を使っておはなしを作る、という課題が出来され、最初はみんな戸惑いました。学校では、山んぼのあぜ道を描くのも定規でまっすぐに引くように教えられ、言わされた通りにしなければと縮こまっている様子です。

絵本作家は「正解も不正解もないんだよ。好きなように自由に作ってごらん」と声をかけます。「間違えてはいけない」と教え込まれた子どもたちの頭を洗い流すような言葉が当たり前のように發せられたのを聞き、嬉しく、なんだかホッきました。



タイの絵本作家ブリーダーさん



絵本作りに集中する若者たち

絵本作家の卵たちの夢

青年向けは、共催の芸術文学協会が呼びかけ、高校生、芸術養成校学生、教員養成校教員などが参加し、1日半みっちり、イラストや絵本作りの基礎を学びました。その集中力たるや、この人すごいと尊敬できる人から学ぶとき、人はこんなに真剣になるものか、とあらためて感じました。

当会ラオス事務所のスタッフの学ぶ機会ともなり、「ラオスの先生はこっちに行きなさい、あっちに行ってはだめ、と行き先を指定するよう」に教える。ブリーダーさんたちは子どもたちに自然に話しかけ、道を広く開いていると新人のスッチャイ。教員研修で講師を務めるスックパンサーは、「ラオスの先生には、彼らのように子どもを惹きつける教え方ができるようになってほしい」と課題を語ります。

青年たちの絵本作りは、2012年3月にバンコクで開かれるブックフェアで出版社への作品発表が目標で、願わくば出版をめざしています。ブリーダーさんはタイに持つ民宿にラオスの青年たちを招いて無償での指導を申し出で、当会でもタイへの移動費をはじめ資金を集めを進めています。子どもたちが想像力を広げ、絵本作家の卵たちの夢を育むために。子どもセンターのご支援をお待ちしています。

支援: Mobela Co., Ltd.、マハーシラーヴィラヴァン財団、Sprit in Education Movement、Nirada School、Christian World Service
(秋元波／ラオス事務所)

はじめる・つながる・つくりだす [2011.7-11]

ラオス 発



こんな先生が全国にほしい！

ラオスの子どもたちが本に出会い、いつでも読める環境が整うことを当会はめざしています。学校に本を届けたら、それで終わりではなく、様々な活性化策が必要です。なぜなら、多くの先生は読書経験がなく、本の活用方法の研修を受けた先生が他校に異動したり、本の紛失を恐れて図書箱にカギをかけてねずみが本を食べてしまったり、実際に子どもの手に本が届く前にいくつものハードルがあるからです。

このほど、当会が2008年までに図書箱を届けた学校のうち30校を巡回訪問し、郡教育局の読書推進活動担当スタッフとともに課題解決に取り組みました。(JICA「読書推進運動の自立的運営の定着化」事業)

1校につき2回訪問。1回目は、それぞれの学校が抱える課題にアドバイスし、新たな活用方法の研修を実施。そして、その効果の検証と未解決課題への対処のため、2回目の訪問を行いました。30校のうち6校をモデル校として選び、本棚、図書、スポーツ用品を寄贈し表彰しました。目を見張る変身を遂げた2校を紹介します。どちらも熱心な校長先生のリーダーシップと先生・生徒のチームワークが印象的でした。こんな先生が全国にほしい！



本を読みながら登校する子どもたち(ホムスック小学校)

北部 ポーケオ県パーウドム郡ホムスック小学校

児童数:266人(カム族、黒タイ族)、教員数:10人(カム族、黒タイ族)

2010年11月の訪問時、本はほとんど活用されていませんでした。図書を置く部屋がなく、教員室の一角落に本棚を置いていました。当会以外の団体からも支援を受け、貸出し方法で混乱したこと一因と考えられます。

今は会議用の広めの部屋に本棚を移し、各担任が図書セットを教室に持ってきて貸出しています。担任が本の紹介をして、子どもの興味を惹きつけます。3年生以上は全員に貸出ししています。



校長先生

校長先生のはなし

ホムスック小学校はカム族の子どもが多く、母語ではないラオス語に馴染みにくかったのですが、絵本に親しむことで抵抗がなくなり、正しく書けるようになってきました。教室に運んで貸出す手間は得られる効果と比べたら全然大変ではありません。

もちろん、最初から先生全員が図書活動に関心を示したわけではなく、非協力的な先生もいました。職員会議のたびに、本の貸出しを各教室で実施することを伝えました。

子どもたちの本への興味が先に行き、先生はそれに追いつくよう貸し出しを始めて、定着していったのです。村の人たちも本を借りに手提げを持って来て、一度に10冊の本を借りています。



優良校を激励。本棚、図書、スポーツ用品を寄贈(ノンケン小学校)

南部 チャムパサック県サナソンブン郡ノンケン小学校 児童数:97人(カターン族)、教員数:3人(カターン族)

1つの教室を2学年で使い、鍵のかかる部屋ではなく、窓を閉じるものもなく、本を保管できる場所がない、生徒は少数民族でラオス語が苦手、先生が足りず仕事が多すぎと全国の学校図書室で耳にする悪条件が勢ぞろい。

そんな学校ですが、図書活動は活発です。3kmほど離れた中心校に本を保管し、毎月、生徒の数よりもたくさんの中を手に持てて来て貸出します。そしてすべての本を全員が手にするまでクラス内で循環させています。それとは別に近くの村人宅に預けている本もあり、毎朝、袋に入れて学校に運んでいます。先生は校長を含めて3人だけですが全員で協力し、子どもたちも手伝って読書活動に取り組んでいます。

かつて本が初めて届いたころは本の紛失を恐れ、貸し出しが渋った先生たち。今や別人のようです。変化した理由は、貸し出しがすればするほど、新しい本を増やせることを知ったから(その仕組み、読書推進センターについて次号で報告します)。すでに貸し出しかードは表も裏も貸し出しだ記録で埋まっているものがたくさんありました。(秋元波/ラオス事務所)

お母さんのいちばん好きな本

北部フアパン県ヴィエンサイ郡のボーンバーン小学校。2009年に開設した図書室のいちばんの常連さんは近所に住むお母さんです。当会スタッフが2011年11月に訪問したときも来ていました。

「いちばん好きな本は何?」とラオス事務所長のスラビーがきくと、「五体不満足」(乙武洋匡著、チャントソン・インタヴォン訳、2008年に当会がラオス語版を出版)のこと。彼女には障害を持つ子どもがいて、「泣きながら読んだ。この本を読んで、私の子どもはふつうの子だと思うようになった」と話してくれました。

スラビーは「胸が一杯になって、子どもが何歳でどんな障害を持っているのか、色々聞くのを忘れちゃったわよ」だそうです。本を読みなれないラオスの人にとって、文字ばかりの厚い本は大人でもなかなか手が伸びません。「今までこの本の感想を話す人はいなかった。お母さんの言葉にとても満ち足りた気持ちになった」と嬉しそうでした。

(秋元波/ラオス事務所)

日本発

8月23日~24日

釜石の保育園の子どもたちに絵本

代表・スタッフ3名で岩手県釜石市の鶴居住保育園と大槌町のおさな幼稚園を訪問しました。当会は4月のビーマイ・パーティなどで集めた絵本を届け、訪問は8月に実現しました。ラオスの人を作った紙芝居を演じ、ラオスの動物クイズや数字を使った遊びなど、いつも違う雰囲気に子どもたちは興味津々。そのお礼に「マル・マル・モリ・モリ」の踊りを元気に披露してくれました。

また、壊滅的な被害をうけた大槌町立図書館を蘇らせようと全国から図書が届く大槌町中央公民館を訪問。私たちもさやかながら図書リストやラベル作りなどのお手伝いをしました。

強く感じたのは、被災地の方々の「私たちがなんとかしなきゃ!」という復興への気持ち。そして、本を通した教育の大切さ。これからも応援ていきます。



絵本で動物クイズ(鶴居住保育園)

10月8日、14日、15日

ラオスの絵本カフェ

絵本カフェは地域で活動するNPOと手を組んで大田国際交流週間の一環として実施したイベントです(大田区地域力応援基金助成事業)。

日本の絵本にラオス語翻訳シートを貼ってラオスの子どもたちに届ける当会恒例の「ラオス語絵本プロジェクト」と食などを組み合わせ、3日間で81人が参加、71冊のラオス語絵本ができあがりました。

NPO大森まちづくりカフェとのランチ、お茶菓子企画はアットホームな雰囲気のひととき。ラオス料理に「思ったより辛いわ」との声が出つつも、ほとんどの方がおかわりしました。

当日ツイッターを見て来た、「おれたちはもう仲良くなったよ」と絵本の読み聞かせをしてくれた高校生とラオス留学生など新しい出会いが広がりました。

「絵本という身近なもので国際協力が出来嬉しい思います」「切り貼りをしているとだんだんラオス語が見慣れてきて親しみがわきました」など感想が寄せられました。



留学生と高校生で二か国語読み聞かせ

出版プロジェクト

●MP研究会のご支援

絵本:「タタと魔法使い」
作:小島真規子 絵:山本恵美子
ラオス語訳:チャントソン・インタヴォン
部数:5000冊

あらすじ:タタは片づけが大嫌い。いつもお母さんに叱られてばかり。魔法使いにお願いします「家族なんていらない!」と。願いは叶い、やりたい放題できるようになったのですが。家族の大切さを語りかけます。



●すかいらーくグループのご支援

絵本:「お星さまきらきら」文字絵本3 第2版
作:ドッグアンドアン 絵:挿絵コンクール入賞者9名の合作
初版アドバイス・デザイン:わかやまけん、大竹雄介
部数:3000冊

文字絵本はラオス語アルファベットに詩とイラストを合わせ、文字を学び始める低学年向けです。先生が「大空にきらきら輝くお星さま」と読むと、子どもたちも「大空にきらきらへ」と声をそろえ、いつの間にか暗唱し、言葉の表現も身につきます。学校でラオス語に初めて出会う少数民族の子どもたちも、遊びながら親しむことができ、いろいろな使い方、楽しみ方ができるのが文字絵本の人気の理由です。

今回の出版はすかいらーくグループの店舗で提供している「ラオス産コーヒー」購買額から支援いただきました。2011年11月、ラオスの小学校で絵本の贈呈式を行いました。

(すかいらーくグループHP <http://www.skylark.co.jp/csr/laos.html>)



みんなでボランティア

ラオス料理店めぐり

塙谷 光さん (理事・活動会員)

「ラオス料理を食べられるお店ってありませんか?」とよく聞かれます。

「東京では、ラオスのこのもののイベントでしか食べられない」という話もあり、自慢するだけのものはあるかもしれません。が、首都圏にも何軒があり、ボランティア仲間で食べに行くことがあります。



首都圏に4店舗を構える「ワザディー」、東京・日暮里にある、店舗の庇にラオス国旗が掲げられていて、値段が手頃な繁盛店の「ブアンタイ」、吉祥寺にある、値段がちょっと高めだけど、落ち着いた雰囲気で味がとびきりな「ラクサン」や、まだ訪ねたことはないけれど、国分寺にある「スクサババイ」などです。神奈川には海老名市の相鉄線つきみ野駅近くに、ゆったりとした雰囲気で味が本格的な「バカラーン」があります。どのお店も雰囲気の良い店内でおいしいラオス料理が食べられます。

だけど、昔ながらの伝統的なラオス料理や、今、ラオスで流行っている料理は、やはりラオスへ行かないと食べられません。どなたか、シンガート(ラオスの焼肉鍋)の食べ放題のお店でも都内で聞いてくださいませんか?

「勉強会」報告

「ラオススイーツ 一緒に 作って 食べて留学生の声を聞いてみよう!」
(8月6日・馬込文化センター)

講師:オラバーンさん(留学生)

ラオスの屋台でお馴染みのかぼちゃプリンとヨージエン(春巻き)を作りました。参加者からは「家でさっそく作ってみたら、とってもおいしいと家族も喜びました」とコメントをもらいました。

講師のオラバーンさんは子ども時代、学校生活について聞かせてくれました。「学校の授業は、黒板を写すばかりでした」と振り返り、自分で考える力をつけることの大切さ、教育の大切さを力説していましたのが印象的でした。

「将来はラオスに戻り、先生になりたい」と夢も語ってくれました。



表紙の写真

今日の授業は終わったけれど、まだ学校にいるの。上級生のおねえさんがラコーンチャ(紙芝居)をやってくれるから。ここは、空き教室を利用した「子どもセンター」。本を読んだり、絵を描いたり、みんなで歌を歌ったりできます。子どもたちの可能性を引き出すことに熱心なセンケオ先生が続けています。先生の想いを受け、日本の学生たちがリコーダー教室を開いてることも。子どもたちは初めて手にした楽器なのに、みると上達して、みんなで楽しく合奏しました。今日は、どんな紙芝居かな。(ダイエンチャン部・シーサタナーク小学校)撮影:押原謙

特定非営利活動法人 ラオスのこのもの団体は、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、公正で平和な地域社会づくりに貢献することです。教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 53号

2011年12月発行 編集人:森透

発行:Action with Lao Children / DeknloyLao

(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: deknloylao@yahoo.co.jp

http://deknloylao.org

都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 歩道7分

郵便振替 00140-6-462494

2012年の予定

2012年も活動ミーティングを奇数月、勉強会を偶数月、それぞれ第2土曜日に開催します(一部異なるものもあります)。事務所オープン日は2月から第1土曜日に開き、初めて会に来まる方への体験活動紹介と事務所でのボランティアの日です。

<活動ミーティング>

現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。

1/14、3/10、5/12、7/7、11/10

<事務所オープン日(予定)>

初めて会に来れる方、活動に参加してみたいという方に活動の紹介をし、発送業者やパソコン入力などを手伝つたいた日です。

2/4、3/3、6/2、9/1、10/6、11/3、12/1

<勉強会スケジュール(予定)>

2/11 ラオス料理&活動紹介、6/9 留学生との対話、8/4 納本カフェ(日本語の繪本をラオス語に)、10/13 ラオスの口承文学、12/8 ラオス(神奈川県)訪問

*各回とも内容は企画調整中です。日程とも変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。みなさんの参加お待ちしています!

<ラオスのお正月 ピーマイ・バーティ>

2012年に30周年を迎える当会。それを記念して30周年記念ピーマイ・バーティを4月に開催予定です。詳細が決まり次第ホームページなどでお知らせします。

メコンのほとり詩 ラオス語のリズム

くし 黒くてきれいな髪とかし
お母さんがリボンを結ぶ
きちんと身支度整えて
これから学校行くんだよ
(和訳:チャンタソン)

来年出版予定の繪本の支援者を募集しています!
詳細は別紙「寄付メニュー一覧」をご覧ください。

ຫວັງ
ນວຍ

ນ້ອງແມ່ນວັນ
ນໍາລົງອາງາ
ນຽມບົວເມືດ
ຫຼຸງບັນ

10

